軽種馬生産技術総合研修センター マンスリーレポート10

米国ケンタッキー見聞記・パートⅣ

世界有数の軽種馬生産地であるケンタッキー州レキシントンで見たシリーズ４回目の今回は，蹄病治療の実態を紹介する。それらは，そこで行われている肢蹄管理の一部に過ぎないが，わが国の軽種馬生産地が見習わなければならない多くの示唆に富んでいる。

個人開業獣医師のケース

Bryan Fraley獣医師兼装蹄師による蹄病治療

ドリームチェイスファームは，功労馬保護団体Old Friendsのサラブレッド引退馬施設で，アメリカ国内で活躍した競走馬が余生を送るために，馬主やファンからの寄付で運営されている施設である。その牧場で蹄病治療を担当しているのが，獣医師Dr. Fraleyである。Dr. Fraleyは装蹄師の資格も持ち，Rood & Riddle Equine Hospital Podiatry CenterのDr. Morrisonに数年間師事し，肢蹄治療を経験した後，独立して「P３」(ピー・スリー)という会社を知人と興した。

ホスピタルプレートの装着

ブラックタイアフェアー
左前蹄蹄葉炎治療

写真左は，患部の治療後，ホスピタルプレート(蹄底を覆う保護板)をネジ止めしているところである。Dr. Fraleyは，蹄を型取りして，それをRood & Riddle Equine Hospital Podiatry Centerの蹄鉄製造専門職のManuel Cruzに送り，これら治療用蹄鉄の製造を依頼し，装着している。

写真右はブラックタイアフェアー号の左前蹄。この馬は挫跖から感染症を起こしたので，治療しているとのこと。ホスピタルプレートを外して患部を露出させた状態である。患部にはマゴット治療(500匹$85のウジ虫を保護板の内部に封じ，患部の壊死組織をウジ虫によって清浄化させる治療法)を施したとのことで，米国では無菌ウジ虫が安価なこともあって結構頻繁に行われているようである。私も以前，日本で蹄癌に対しマゴット治療の経験はあるが，無菌ウジ虫１匹が100円であった。

蹄尖裂・
ホスピタルプレート装着状態

蹄尖裂の患部

写真は裂蹄から感染症を起こした元繁殖牝馬で，左は白いホスピタルプレート装着状態，右はホスピタルプレートを除去し，患部が露出した状態である。この治療を行えば，約２ヶ月で元の蹄に復帰するとのことであった。

ワレンダー 右後蹄フィッシュテール蹄鉄

写真左はワレンダー号の右後蹄で，繋靭帯炎のため，蹄後半部の支持力向上の目的でフィッシュテール蹄鉄を装着している状態である。

厩舎の入り口の壁に面白いものを見つけた。写真下に示した，わがJBBAのプレートである。この牧場には，日本で種馬を引退したブラックタイアフェアーのほか，ワレンダー，オジジアン，クリエイター，サンシャインフォーエヴァー，フレイズが余生を送っている。単身の海外出張であったが，どこかで日本と繋がっている妙な安心感を覚えた瞬間であった。

JBBAプレート